

Title	校本『新和歌集』(下)
Sub Title	A collated text of the Shin Wakashu (II)
Author	小林, 一彦(Kobayashi, Kazuhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1987
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.51, (1987. 7) ,p.1- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00510001-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00510001-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 校本『新和歌集』(下)

小林 一彦

前号に引き続き、本稿では巻六以下の後半部分を掲載する。  
 底本は神宮文庫蔵特別本である。以下に校合に用いた諸本と  
 その略称を示す。

- 神宮文庫蔵本(神)
- 学習院大学国文学科研究室蔵本(学)
- 宇都宮二荒山神社蔵本(荒)
- 彰考館文庫蔵本(彰)
- 天理図書館蔵本(天)
- 群書類従本(群)

ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵本(清)

凡例及び諸本の概略等については、前号を参照されたい。

尚、ノートルダム本の全四二首を歌番号で示せば以下の如く  
 である。

三四	兜	五	二三	一四一	一七	一八一	一四
三五	二九八	三〇	四七	四八	四九	五	三五
三八〇	三八九	四六	四五	四九	四八	四八	五七
五三三	五四〇	五九	五七〇	五七二	五三	六二四	六三一
六五五	六五	七〇八	七三	七三	七七	七五	八〇
八四	八四						

新 和歌集卷第六

離別哥

四三\* 申つかはしける一つかはしける(彰)

四三 　あつまへくたり侍けるに道より申つかはしける　　淨意　法師  
しるらめやわかのうちをたちわかれともなしちとり雲に鳴とも

四三 今はとてたちわかるなるうら風はかへる波ともえやはまたるゝ

京極入道中納言

もとは宮この人の下野に侍けるか、あからさまにのほりて  
くたりけるに申つかはしける　　惟宗　行経

四四\* のほりてくたりーのほりて。たり(彰)

四四 住佗しもとの宮こを忘るなよ今は東の人となるとも

百首哥に、別　　藤原　泰綱

四五\* とまるをーとまるも(神学荒彰天群)、\*おなし

四五 一すちにゆくを別といひもせしとまるをおなし名残ならずや

ーをなし(神)、\*名残ーなうり(彰)

宇都宮にくたりて侍けるあかつきはたゝんとての夜、  
人ゝなこりおしみ侍けるに、程なく<sup>三ウ</sup>あけにければ

まかりたちて道より　　藤王橋下傀儡

四六\* 侍けるーはへりけるか(彰天)、\*なこりー名残

四六 暁のつらさはいつもならひにきあやなかりつる夜半のほと哉  
京よりくたり侍けるに、いけたの傀儡かめつるきせかはま

を(学荒群)、\*おしみーをしみ(神彰清)

四七\* 傀儡かめつるー傀儡かめつる(学荒彰天群)、\*藤

四七 \*なれきつる袖の別の露けきはかたみにかゝる涙成けり　　藤原　時朝

原時朝ー藤原時朝(本行「朝」字「都」トモ判読  
可(彰)、\*(合点)ーアリ(学荒群)、\*露けきー

四八 　かへりこむほとしもあらし高砂のまつとないひそ心つくしに　　照因　法師  
あひかたらひて侍ける女を、出家のゝちおやのもとへつか

露けさ(彰)  
露けさきイ

はし侍けるとときゝて申つかはしける　　信生　法師

四八\* さくり題にーさくり題(神)

四九\* 別哉―別哉(彰)、わかれには(天群)

四〇\* 家―いる(神学荒彰天)

四一\* おひては―おひては(彰群)、\* 残―心(彰)

四二\* おほえ―おほ(天)

四三\* 嘉禎―嘉禎(彰)、\* 上洛―上路(群)、\* はし―

はしにて(神学荒彰天群)

四四\* とたえ―とた(神)、とた(天)

四五\* くれにけり―暮にける(神学荒群清)、暮ける(天)

四六\* けふ又―けふもまた(神学荒彰天群)、\* おろし―をろし(彰)、\* みな―いな(彰天群)

四九 かきくらしゆく空もなき別哉とまるもとまる心ならしを

返事

蓮生 法師

四〇 いま更にわかるとなにか思ふらんわれこそさきに家はいてしか

蓮生法師京へのほりけるに申つかはしける

藤原 時家

四一 わきてよのわかればかなしもろともにおひては末の残なければ

羈旅哥

大番はてゝくたり侍けるに、白河の花の木すゑ見すてかた

くおほえければ

平 光 幹

四二 しら川の木すゑにとまる心哉都をいつる春のあけほの

嘉禎四年春のころ將軍家御上洛のとき供奉し侍けるに、は

まなのはしよみ侍る

藤原 時朝

四三 たちわたるはまなの橋の朝霞みて過かたし春のけしきは

藤原景綱百五十番哥合し侍けるに、羈中嵐

証定 法師

四四 たひ衣かさなる雲はとたえしてあらしをわくるみねのかけはし

旅夕

浄意法師女

四五 なるみかたしほのひるまを侍ほとに行やらぬみちに日そくれにけり

旅泊重日といふことを

仙風 法師

四六 けふ又むマデ山おろしうみふけはみなのみなとになをやとまらん

藤原時朝五十首哥に

藤原 基政

四七 かち人は暁ことにいそけともやとにさきたつ夕くれそなき

修行し侍けるに八橋の木の蔭におりいてかきつはたをよみ

侍ける

信生 法師

四六 \* 八橋―やつかはし「か」字上朱ニテ〇印(彰)、  
\* おりいて―おりひて(神学荒彰)、をりひて(群)

四〇 \* 遠き―とをき(彰天)

四二 \* 猶―なを(天群)

四三 \* 題しらす―たひしらす(天)、\* ふまぬ―ふまむ  
(彰)、\* 猶や―なをや(彰天群)

四三 \* たつ―たす(彰)、\* おきて―をきて(学荒彰群)

四四 \* そ―ら―そこら(彰天群)

四四 \* 猶―なを(天)、\* ゆく―をく(彰群)、おく(天)

四六 \* あくかる―あくかるれ(彰)、あくるかな(天  
群)

四六 \* (合点)―アリ(彰)、\* 東ちは―あつまちや(学  
荒)

四六 杜若よゝを久しくへたてゝもむかしの跡の色そ残れる

信生法師にあひつれて侍けるか折句によみ侍ける

四六 西音 法師

四七 かくしつゝきえもやられぬ露の身のはてはいかなるたひにか有らん  
宇都宮神宮寺廿首哥に

四〇 是るゝとさやの中山なかき日にこえても遠き東路の末

四〇 素遍 法師

四二 こえなはと思ひし峯にきてみれば猶行末も山ち成けり

蓮生 法師

四三 いしふまぬあそのかはらにゆきくれぬみかほの関に猶やとまらん

藤原 泰綱

四三 たひ衣あさたつのへの白露のおきてや袖のぬれまさるらん

法眼 円瑜

四四 草枕ふたゝひ結ふやともなしそゝらたひねの数はつもれと

源 親 行

四五 むさし野やおちて草葉に猶そゆくわけ行人の袖のしら露

藤原 景綱

四六 月にこそやともさためすあくかるゝよるはこえしと思ふ山ちを

座蓮 法師

四七 秋しもあれ都をいてゝ東路やきよみか関の月をみる哉

藤原 朝氏

四六 \* 東ちはみやこ恋しき旅なれはいるかたしたふ有明の月

百首哥中に  
円勇 法師

四三 \*行かへる―詰句いかゞゆきかへる(学荒)、\*遠き―とをき(彰天群)、\*いにしへ―いしふみ(学荒彰天群)

四四 \*のち―のり(天)

四一 \*いな―のな(天群)、\*山を―嵐を(神学荒彰天群)

四二 \*頼業―頼業(学荒群)、\*枕も―枕の(彰天)

四三 \*いへち―いゑち(彰天)、\*なにと―なにか(天群)

四四 \*中山と―中山に(彰)、\*(合点)―ナシ(彰天)

四五 \*経綱―経綱群、\*なむあみた―なもあみた(彰天)、\*をきて―おきて(神天)、\*侍けると―侍けるか(神)、\*をくり―おくり(彰天)、\*大納言―大納言為家(学荒群)、\*たえて―たへて(神学荒彰天群)

四三 \*行かへる雲のかりにことつてむみやこは遠きつほのいにしへ

冬朝旅

念生 法師

四四 霜むすふのちのさゝ原ふみ分てあさたつたひの袖そ寒けき

題不知

藤原 景綱

四一 末とをきいなさゝはらゆきくれぬ山をさむみ宿はなくして

藤原 頼業

四二 かたしきの袖の涙のいかなれは草の枕もうきしまかはら

信生 法師

四三 草枕いへちをなにといそくらん古郷とてもかりのやとりを

祖父の配所へおもむき侍けるに中山といふ山をこゆとて

蓮生 法師

四四 行末もおほつかなきをいかにしてしらぬ山ちを独こゆらん

旅宿松風

照因 法師

四五 こけふかきいはねかたしく袖のうへになれぬみ山の松風そふく

証定 法師

四六 夢のうちはいつくもおなしたひなれはさむるうつゝの宮こそままつ

哀傷

尾張権守藤原経綱すみ侍ける人身まかりて後夢に、なむあ

みたふつといふもしをはしめにをきて哥をよみてとふら

へ、と見侍けるときよてよみてをくりける 冷泉前大納言

四七 見しはうきくはかなしき世中にたえて命のうたてのこれる

権中納言

四六 \* 思ふかは―思ふかは女歌(学)、おもひかは(彰天群)

四六 つかゝりし契りのほとを思ふかはあざからすとは涙にそしる

右兵衛督三云ウ

四九 \* つゐに―つゐに(彰)、つひに(天)、 \* 契の―契は(学荒彰天群)

四九 つゐにゆくみちのしるへと頼哉すゝむる夢にむすふ契\*

左京権大夫信実朝臣

四〇 \* 左京権大夫―左京大夫(彰)、 \* ちひろ―ちひろ(荒)

四〇 もらすなよちひろのそこはおもくともちかひの綱のうけにすくひて

左中将光成朝臣

四一 \* 猶―なを(天群)

四一 詠つる花も浮世の色なれば散を別と猶しらせけり

中務大輔為継朝臣

四二 \* 猶―なを(天)

四二 つてにきく御法の海はふかくとも猶ゆきやすき方を頼まん

法眼 円瑜\*

四五 \* 円瑜―円瑜上「瑜」字草体、下「瑜」字楷書 別筆(学)、 \* をくれ―おくれ(天)

四五 なにとしてをくれさきたつならひのみさためなき世にははらざるらん

蓮生 法師

四六 \* かはる―替かへ歌(学)

四六 あはれなをとまる命もある物をかはるならひのなとなかりけん

藤原 泰綱

四五 \* とくにそ―とくに(彰天)、 \* ける―けり(天)

四五 身のうさもつらさもひとつ別にて思ひとくにそねはなかれける

藤原 頼業

四七 \* ならでも―ならずも(学荒)

四七 ふして思ひおきても夢の心ちしてうつゝならでも世をすくす哉

藤原 時朝

四八 \* おしもし―をしとし(神)、 \* とふ―思とふ(神)、 思ふ(彰)

四八 ありてうき身はなからへて世中におしとし人の別をそとふ

藤原 経綱\*

四九 \* 経綱―経綱尾張権守 藤綱之子(学荒)、 経綱尾張守 藤綱之子

四九 露の身の消にし跡の別にはぬるゝ袂そかたみ成ける

藤原 時光

(天)

四九 かし人のなきを夢とはおとろかしあるもうき世のうつゝならねは  
藤原 景綱

四〇 \*ならぬーならむ(彰天群)、\*外にーほかの(天)

四〇 なにかその人の哀もよそならぬうき世の外にすまぬ身なれば  
一首に詠てをくりける  
平 長 時

四一 \*一首にー一首(荒)、\*をくりーおくり(彰天)、  
\*契てそーちきりても(彰天群)

四一 なあもあみた仏と今は契てそ浮世の夢をおとろかすらん  
昔あひしれる人のもとより、なくなれる人のかすをしるし  
ておせ侍ける返事に  
浄意 法師

四二 \*おこせーをこせ(学荒群)、\*もしーみし(神学荒  
彰天群)

四二 \*もし人のなきをしらてそやみなましうきは都の便成けり  
壬生二品身まかりぬときゝてたよりにつけて「モウ」つかは  
しける  
侍従隆祐朝臣

四三 \*壬生二品ー壬生二品(学荒)、\*つかはしー申つ  
かはし(神学荒彰天群)

四三 いかはかりかつなけくらんよそにたにみし面かけのさらぬ別を  
返事  
侍従隆祐朝臣

四四 \*侍従隆祐朝臣ー家隆卿ノ子侍従隆祐朝臣(学荒)、  
\*いまもーいも(荒)、\*猶ーなを(彰天群)、  
\*みてしー見えし(彰天群)、\*おはりーをはり  
(神)

四四 いまも猶なけきをさらぬ別哉みたれすみてしおはりなれとも  
あひともなひたりける女、わつらふことたいしになりてほ  
かへうつり侍ける時、\*おりから時雨のし侍ければ 平 経 時

四五 \*侍ける時ー侍ける(神)、\*おりからーをりから  
(神学荒彰)、\*初雨時ーはつ。くれ(彰)

四五 思ひねのなみたあらそふ初雨いつれかまつはそてぬらすらん  
たいしらす  
藤原 頼業

四六 \*たえねーたゝね(天)

四六 別にし人のかたみの夕けふりいかなるかたの雲と成らん  
父信生身まかりたりけるのちのわさし侍てあしたによみ侍  
る  
藤原 時朝

四七 \*たえねーたゝね(天)

四七 たき捨しけふりもいまはたえねともけたぬ思ひは身に残り  
武蔵守平経時の室身まかりにけるころ  
蓮生 法師

四六\* なげきーなげき(天)

四九\* あひーあい(天)、\*おとこーをとこ(清)、\*待けるー侍る(天)、\*わかれてはー新編古今集入わかれては

(学荒)、新編古今集入わかれては(群清)、\*へくーへき(彰)

四〇\* 信実朝臣ー信実朝臣法名寂西(学荒群)、\*をしへーおしへ(彰天)

四三\* をくーおく(天)、\*つゐてにーつゐてに(神学荒彰天群)、\*なをー猶(彰)

四三\* 返事ー返し(荒彰天群)、\*九条三位ー九条三位蓮生ノ女か可尋(学群)、九条三位蓮生ノ女か可尋(荒)

四四\* をくーおく(天)

四五\* あひーあい(天)、\*くたるーくたりたる(彰天)、\*念忠ーナシ(天)、\*みえんーみへん(天)、\*いはし水ーいわし水(天)、\*こゆーとゆ(荒)

四六\* ぶりけるに申ーぶりけるに人のもとへ(朱)申(学) ぶりけるに人のもとへ申(彰天群)

四六 たれよりも心やすしと思ひしはまさるなげき\*のふかき成けり  
としころあひなれけるおとこ身まかりて後よみ侍ける

尼西蓮

四九\* わかれてはなからふへくもなかりしにあれはあらるゝうき身成けり  
母の身まかりけるに、念仏すゝめておもひのことくおはり

とけはへりぬ、ときゝて申つかはしける 左京権大夫信実朝臣  
をしへやるみちをまことと思ふにも心やすくそ人はさきたつ

四〇 返事 蓮生 法師

四一 ゆきやすきみちにも人をさきたてゝ跡を尋ぬるほとそ悲しき  
五十日逆修とけ侍て、はか所なとしたゝめ\*をくよし申つか

はしけるつゐてに

四三 しはしなを此世にありと見きくともとは、昔の跡と尋よ

返事 九条 三位リテウ

四三 きみはよしさてとゝまらはわかれちに我そさきたつ跡はとはれん

たいしらす 信生 法師

四四 思ひいつることのはに\*をく露の色をいつくの草の影にみるらん

あつまよりあひくして侍ける女京にてはかなくなりける  
後、かのおとこひと\*をりくたるとき\*をて申つかはしける

四五 なき人のかけやはみえんいはし水又逢坂の関はこゆとも

武蔵守平経時の室身まかりける中陰にこもりて、九月十  
三夜に雨のふりけるに申つかはしける 藤原 時朝

四六 物思ふこのさとはかりかきくれて外にや月のさやけかるらん

四七\*をくれて―おかれて(天)、\*ましりて―まぢりて(天)、\*たのます―たのまん(字)、たのまんスイ

(荒)

四八\*をくれ―おくれ(天)

四九\*心よ―心に(字)、心に(荒)、\*しほる、―しく上敷  
る、(影) ヤイ

四一\*ほと、きすかな―ほと、きす(天)

四三\*さしても―さえても(影)、らさらても(天群)、  
\*たゝ―たに(字荒)、又(影天群)、\*ならひは  
―ならいわ(天)

四四\*ものを―ものと(影天群)、\*たゝぬ―たえぬ  
(神)、たゝむ(影天群)

四五\*露を―露ぞ(字荒)

長門守藤原時朝めにをくれて侍ける比人くに無常十首よ  
ませけるに、

寄雪無常

浄忍 法師

四七 久かたのあめにましりてふる雪のしはしあるへきよとはたのます

寄露無常

西音 法師

四八 露むすぶ草はをわくるたひ人もをくれさきたつ道やしるらん

寄雲無常

四九 別にし心よいかにあま雲のよそに聞たに袖そしほる、

寄花無常

源 頼 明

四〇 なき人のかた見に忍ふ桜花忘て過よ春の山かせ

若松の禪尼四十九日卯月の六日なりしに、けふはみなきみ

しのひねをなく人もしらすかほなるほときすかな、と申

つかはしたりし返事に

藤原 景綱

四一 けふのわか心をしらはほときすしのはぬほとのねをそなかまし

母の服に侍ける五月五日によめる

浄意法師女

四二 すみそめの袖になみたのかゝるかな五月の玉をよそになしつゝ

題しらす

蓮生 法師

四三 思へたゝさしてもいそくみちにたゝさきたつ人をしたふならひは

人の後生とふらへと申たりける返事に

藤原 朝基

四四 とまりゐはとふへきものを思ひしれたかさきたゝぬことはしらねと

はかなくなりける人のはかにまかりて

藤原 朝基

四五 なき人の面かけとまる跡にきてけふは袂に露をかけつゝ

四六\* 猶一なを(天)、\* おしみーをしみ(彰)

四七\* なるゝーなるゝ(学)、なけゝ(彰天群)

四八\* 竹御所ー叫御所(「叫」字左下ニ不番紙、又上欄  
余白ニ「品」字(不番紙アリ)アリ)(学)、叫御所  
(荒群)、竹御所(本行「竹」字草体)(彰)、叫御  
所(清)、\* 給てのー給てのち(学荒彰天群清、  
\* まいりてーまゐりて(清)、\* ちりもーちりて  
(荒)、\* ふかきーふかき(学荒)、ふるき(彰天群  
清)

四九\* なくさまぬーなくさまし(彰)、なくさまん(天  
群)

四五\* (合意)ーナシ(彰天)、\* にてーとて(天)

四三\* 世中にー世の中は(彰天)

四五\* をくれーおくれ(神天)

題しらす

四六\* 風にちる花よりも猶はかなきはおしみし人の命なりけり

平光幹

四七\* おほかたのはかなき世をはなるゝとも身のうへしらぬ我涙かな

藤原朝氏

四八\* 竹御所かくれさせ給てのつねの御所にまいりてよみ侍る

藤原重頼女

四九\* いかはかり涙もちりもつもるらん君なき床のふかき枕に

藤原泰綱

四〇\* 夢とのみ思ひてたにもなくさまぬみし面かけのうつゝならすは

想生法師

四一\* しかりとて夢とはいかゝたのむへきうつゝはかなき世とは思へと

藤原基氏

四二\* われは又たかねさめにかかたられんこよひも人を夢にみぬ哉

藤原親朝

四三\* はかなしやうつゝはいつのならひにてさなから夢の上をなけくらん

良空法師

四四\* まほろしのあるかなきかの世中にうつゝすくなきゆめにそ有ける

有尊法師

四五\* くれ竹のみしかきよはの夢よりも見はてぬ物はうつゝ成けり

浄意法師

四六\* 昔よりをくれさきたつならひあらは別を更になけかすも哉

母のおもひに侍けるころ同じおもひなる人のとふらひける

四六 \*母の—女の(彰天群)、\*人の—人(彰天)、\*と  
ふらひける—とふらい(天)、\*をくる、—おく  
る、(天)、\*心をそ—心をは(神学荒彰天群)

四七 \*詞書—ナシ(彰)、\*さはかし—さはかし(神)、  
\*侍る—はんへる(天)、\*おとろく—をとろく  
(彰)

\*恋哥上—恋哥(荒)

四八 \*《合志》—ナシ(学荒天群)

四九 \*神行邦—神行郊(神学荒群)、\*しらなむ—しら  
なんれい(学)

五〇 \*おさふる—をさふる(群)

五一 \*おなし—をなし(神彰)

返事に

四六 おもひやれをくるゝあとの心をそうかりし時になれてしらん  
よの中さはかしくて人／＼おほくうせにけるころよみ侍る

藤原 景綱

四七 いまさらにおとろくへしやあたしよにたとひいかなることをきくとも

(十行分空白)

新 和哥集卷第七

恋哥上

百首哥中に、初恋

藤原 景綱

四八 見ぬ人のうはの空にもこひしきはなにをたよりの心なるらん

宇都宮神宮寺廿首哥に

浄忍 法師

四九 ゆらのとをあさ霧かくれこく舟のこひわたるとも人はしらしな

神行 邦

五〇 君こふるわれとしらなむいはせ山谷の下水忍ひく／＼に

寄鳥忍恋

座蓮 法師

五一 あしひきの山郭公かくれて人にしられぬねをのみそなく

寄涙恋

平秀 政

五二 しのへともおさふる袖をもる物は心にあまる涙なりけり

藤原 景綱

五三 忍ふるもおなしわか身の心よりほかなる物ともるなみた哉

清原 公高

ル 四二ウ

吾五\* 恨らん―恨こん(神)

吾六\* 猶―なを(彰天)

吾七\* あさ茅生の―浅茅の(学)、浅茅。の(荒)、\*を  
の―おの(神彰天)

吾二\* かゝりひと―かゝりと(神学荒彰天群)

吾三\* はつへき―いつへき(神)、はイいつへき(学荒)

吾三\* 隆快―隆快扶「扶」字上朱ニテ〇印、「快」字朱  
(彰)

吾四 思ふよりぬるゝは袖のならひにて恋にさきたつ涙成けり

百首哥に

仏也 法師

吾五 なにゆへにつれなき人を恨らん思ひそめしは心なりけり

座蓮 法師

吾六 さても猶忍初はんとこそ思ひつれたか心よりおつるなみたそ

寄草。恋

藤原 泰綱

吾七 \* あさ茅生のをのゝしの原尋ても思ふあまりをいかてしらせん

藤原時朝稲田姫社にて十首哥講し侍けるに、欲言出恋

右大弁光俊朝臣

吾八 それをたにしはしやすめてなくさめんいはねはむねのさはく思ひを

たいしらす

高階 重氏

吾九 あらゆるそのいはにかけこす白波のくたけて人をこひわたる哉

蓮生 法師

吾一〇 あき山に霜ふりおほふもみちはの下こかれなるこひもする哉

藤原 親朝

吾二 大井河うふねにともすかゝりひのかゝりひとたにもほのめかさはや

大江 経盛

吾三 かくとたに思ふ心をしらせはやさのみはいかゝ忍ひはつへき

権律師隆快

吾三 いかにせむ涙の色もかひそなきとへかし人のものや思ふと

平時重

吾四 ゆきかよふ心はかりをしるへにて忍ふおもひをとふ人もかな

五五 あらはれてたか涙とかゝこたまし忍ふにおつる露の白玉  
弥陀信法師

五六 今はたゝ思ふこゝろを残りなくしらすほどのことのはもかな  
蓮生 法師  
橋 友家女

五七 さえゆけは涙もこほる冬の夜にひとりかたしく袖をみせはや  
題しらす  
藤原 泰朝三三ウ

五八 \*消いきへ(彰)、\*われに―つれに(神)

五八 ときしあれははるは氷も消\*にけりいつかは君かわれにとくへき  
寄浪増恋  
藤原 泰綱

五九 \*藤原泰綱―藤原泰朝(彰)

五九 名取川せゝにくたくるいは波の猶わきかへりおもふころ哉

五〇 \*らめ―らめむイ(彰)

五〇 かきりあれはいはにくたくる白波もあらはれてこそつれなかるらめ  
源 親行  
冷泉前大納言家に恋百首哥奉りける中

五一 \*をと―音(天群)、\*たてゝ―たちて(群)、\*荻

五一 吹風のをとにたてゝもしらせはやのきはの荻のそれとはかりも  
忍久恋  
源 宗景

―おき(神学荒彰群)

五二 \*くもみの―雲ゐる(神学荒彰天群)

五二 としふとも色にはいてし時雨つゝくもみの山の嶺のときは木  
恋哥よみ侍ける中に  
浄意 法師

五三 心にはしのふもちすり忍へともみたれにけりな袖のしら露

\*互忍恋

清原 時季

五四 \*互忍恋―牙忍恋(神)

五四 もろともに忍ふもちすりたか袖かみたるゝ露のかすまさるらん  
京極入道中納言家に千首哥奉りけるに、顕恋を  
藤原 時朝

五五 しはしこそ袖に涙をつゝみしかいまは人めにあまりぬるかな

吾六\*しのふるーしのふは(学荒彰天群)

寄涙恋

西人 法し

吾七\*なをー猶(学荒群)

吾六 今はたゝ人めもしらぬなみた哉しのふるこひのはしめなりけり

円嘉 法師

吾六\*太政大臣ー大政大臣(神学荒群)

吾七 いつまでかしはし涙をせきとめてうとき人にはなを忍ひけん  
富小路太政大臣家に百首哥たてまつりける中に、祈恋を

藤原 時朝

吾六 なからへはつらき人にもあふやとておしからぬ身をいのる比かな  
題しらす

蓮生 法師

吾〇\*あふ事はーあふことを(学荒彰天群)

吾元 いのりこしみむろの山のくすかつら神をかけても恨つるかな

想生 法師

吾二\*いなーゐな(神学荒彰群)

吾〇 あふ事は神にそいのる榊葉のときはかきはに人をこふとて  
鶴岳社十首哥に

藤原 朝景朝景

吾二 逢事はいなのさゝ原いつともつれなき色のかはる物かは  
題しらす

藤原親朝女

吾三 あふせなき涙の川にしつみつゝふかくも物をおもふころかな

藤原 言盛

吾三 身をなけてあふせもあらは涙川いきて思ひふにしつまさらまし

坂上 道清

吾四 わか袖はみわたになひくうき草のうきあた浪のかけぬまそなき

藤原 時朝

吾五 衣笠内大臣家へたてまつりける中に  
涙川みなとは袖のうらなからわが身こかれてよる舟もなし

源 信行

吾五\*中にー哥中に(神学荒彰天群)

藤原景綱百五十番哥合に、寄煙恋

五三 きえかへりあさまの煙いたつらに空にのみしてたつわかな哉

藤原 朝高

五四 消かへるふしの煙の空にのみうきて思ひのはてそかなしき

丹波広長朝臣

五五 しらせはやもゆらんふしの山よりも猶身にこえてあまる思を

想生 法し

五六 きえよたゝなひくかたなき夕煙わか身あさまの名をたてぬまに

藤原親朝臣

五七 蚊遣火の行かたもなきけふりこそむせふ思ひのたくひ成けれ

信生 法し

五八 ひかすのみつもりのあまのぬれ衣かけても今はかゝくまそなき

大中臣光成

五九 思ひかねよるの衣を返してもねはこそ人を夢にたにみぬ

藤原 時家

六〇 ちゝわくに思ひみたるゝかた糸のあふことをなみ年そへにける

素暹 法師

六一 つれなさを恨よとてやときは山下はふくすの風の吹らん

長円 法師

六二 つれもなき人をはいはすあはれともうしとも何を恨そめけん

藤原 景綱

六三 つれなきをわか身のうきに知らさばなしはてす恨みるらん

六四 逢まてとこふ日もたれかためなれば命にかきる物思ふらん

五二 \*山よりも一山よも(神)、 \*猶一なを(彰天)、 \*あまる一あさる(天)

五三 \*藤原親朝臣一藤原親朝女(神学荒彰天群清)、 \*けれ一けれ(彰)

五四 \*《合点》一ナシ(神彰天)

五五 \*恨みるらん一うらみさるらん(彰)、 うらみらるらん(天)

吾六 \*しほるしほりしをるしをり(群)

吾六 こひちにもしほるしほりのあとしあらは思ひ入ともまとはさらまし 源頼明

吾兒 \*(谷忌)ナシ(天)、\*ふーこふ(天)

吾兒 まよひ行末はいかにとふへきにわかこひちにはあふ人もなし 素蓮 法師

吾〇 \*大江季房一大江季房一興イ 貼紙(学)、\*くるしきーくるしき(天群)

吾〇 とし月はこえて行ともあふ坂の関のこなたに思ひくるしき 大江 季房

吾一 つれもなき心の花の下ひもははる待えてもとくるものかは 藤原 蔭清

吾二 いかにして花の下紐とけぬらんはるもつれなき人のこゝろを 坂上 道清

吾三 わかやとの桜ひと木の花ならはつれなき人も尋きなまし 平 尚 時

吾四 \*をかはや一おかはや(神彰天)

吾四 宇都宮神宮寺廿首哥に 浄忍 法師

吾五 \*猶一なを(彰天)、\*おし一をし(神彰)

吾五 恋しなむ後にあふよのあるへくは猶おしからぬ命ならまし 藤原 基隆

吾六 こひしなむ後のむくひはある物を逢にかへたる命ならねは 平 忠 幹

吾七 しらさりき逢みるほとのうれしきに後には物を思ふへしとは 藤原 泰朝

吾八 むくひあらはわれもつれなき身と成てこんよも人にあはしとやす 浄意 法し

五九 \*たのまねは―たのまぬは(彰群)

平道 好

権律師謙忠

五九 かくはかり思ふといふをたのまねは誰につらさをならひそめけん  
なをさりのときや人めをつゝみけんけに思ふには身をもおします

寄夢恋

清原 時季

五〇 うつゝには逢事かたしむは玉の夢にもせめてみるよしもかな

寄衣恋

清原 時高

五一 \*かくしても―かくしても(学)、かへしても(彰天群)

五一 \*かくしても何にかはせむさよ衣逢みることのうつゝならねは

群)

清原 光定

五二 こひ衣なか／＼袖のくちねかしあるにそつもる露も涙も

百首哥に

藤原 泰綱

五三 \*ならはねは―ならはねと(群)、\*猶―なを(神学荒彰天群)

五三 かくたのむうつゝを身にはならはねは逢夜を猶も夢とこそみれ

不遇恋

浄意 法し

五四 \*まつらそ―まつこそ(神学荒彰天群)

五四 ひとすちに夢をまつらそはかなけれかならずしもや逢とみるへき

藤原時朝五十首哥に

藤原 基政

五五 きたへの枕のちりとなりにけりとしへてあはぬこひのつもりは

恋哥中に

源 長 経

五六 ちりならぬ名はたちなから逢事のむなしき床をはらふ秋かせ

秋夕恋

西円 法師

五七 わひはてゝまたしと思へはひくらしのなく夕くれに秋風ぞ吹

題しらす

藤原親朝女

五八 いたつらになかむるくれもある物をまつをくるしと何思ふらん

吾〇 \*をきしーおきし(神彰天清)、 \*猶一なを(彰天)、  
\*夕くれをー夕暮と(学荒)

藤原泰家女

吾〇 契をきしけふはその日に成ぬれと猶\*\*\*夕くれを待そくるしき

藤原 基隆

吾 誰にかもことつてやりておほとものみつの浜なるまつといはれん

待恋哥とて

顯信法師女

吾三 \*猶一なを(彰天)

吾三 偽の昨日のくれにこりもせてこよひの空も猶\*\*またれつゝ

寄月恋

平 忠 幹

吾三 \*よゝしーよし(神学荒彰天群)

吾三 今更に月夜よゝしとは詠てもつれなき人をいかにまたまし

権律師隆快

吾四 いまこむとたのめしくれの秋の空ひとりも月の更にけるかな

蓮生 法師

吾五 こぬ人をまたせくゝて月影の入なむとするそらそかなしき

源 長 継

吾六 わひつゝもねなましよはのむら時雨くもりもはてぬ月もうらめし

藤原 俊定

吾七 やとりこし袖にもうとく成にけり涙にくもる夜はの月かけ

始逢恋

浄意 法師

吾八 こよひこそあふくま川のみをつくしくちぬるそての程もみゆらめ

寄枕恋

証定 法師

吾九 こよひさへ枕の塵をはらはてやつもる思ひの程をみすへき

道阿 法師

吾〇 にゐまくらこよひよりこそすかのねのなかき契を結び初つれ

五二 \*をくーおく(神彰天)、\*を車ーおくるま(神学荒  
彰天)

寄錦恋

大江 季房

五二 むすひ\*をく契ありてや\*を車\*のにしきのひもとのとけはしめけん  
寄鳥恋

藤原 景綱シ

五三 こひく／＼てまれにとけぬる下紐のゆふつけとりのねこそつられ  
宇都宮神宮寺廿首哥に

藤原 時家

五三 あけぬとておなし心になく鳥をつらきためしとなに恨らん  
題しらす

大中臣能宣範

五四 あくるよをつくる八こゑのとりのこのかへらんとする空そかなしき  
寄鳥別恋

藤原 泰綱

五四 しのゝめ\*のあくるわかれのねにたてゝたかなみたとか鳥の鳴らん  
暁恋を

藤原 真義

五六 あふさかの木綿付とりもあかつきのわかれをたれに鳴はしめけん  
権律師頼観

五七 \*をとーおと(神学荒天群)

五七 待わひてうらみなれにし鐘\*のをとはあふ夜もつらし暁\*の空

照因 法し

五九 \*をころかぬーおとろかぬ(神学荒彰天群)、\*音  
ーをと(神学荒彰天)、\*とそーそ(学荒彰天  
群)

五八 うき物といひしは人のよかたりの思ひしらるあか月の空

藤原 朝忠シ

五九 うき物とき\*をとろかぬ暁\*のかねの音\*とそ身に\*しられけれ

法眼 円瑜

五〇 うき物とさしも思はぬ有明の月は今こそ身に\*しられぬれ

藤原 親長

五一 今そしるうきあかつきのならひとてわかるゝ空の有明の月

五三 \* 猶一なを(神学荒彰天群)

五三 暁はかねて思ひしつらさにも猶あまりぬる袖の露かな

西善 法師

藤原重頼女

五三 うき物とゆふつけ鳥のねにたてゝこぬ夜はかりそしのゝめの空

後朝恋を

藤原 重継

五四 \* わかれはかれ(彰)、 \* たえてたへて(学荒)

五四 あさ露のおきてわひしきわかれ哉いかにたえてかくれをまつへき

(三行分空白)

新 和哥卷第八

恋哥下

宇都宮神宮寺甘首哥に

素暹 法師

五五 君をわか思ふ心のいろならはちしほやちしほそめてみせまし

平 光 幹

五六 かすか野のわかむらさきの色にいてゝふかくも人を思ひそめつゝ

朝恋を

藤原 公綱

五七 \* 露より一露よ(神)

五七 見せはやなけさわかきつるみちしはの露よりもろき袖の涙を

\* 寄源氏恋

有尊 法師

五八 \* 寄源氏恋一寄源氏恋 物語ノ二字違フル歟 (学)

五八 物思ふなみたの川のはやきせに身をうき舟そ独こかるゝ

寄河恋

源 宗 景

五九 なみたのみなかれてふかき思ひ川あふせは人の心なりけり

平 幹 繩

六〇 ひにそへて歎くにまさる涙川いとゝあふせもたえやはてなむ

哭ウ

六〇三\*のみはーのみそ(神天)

六〇三\*百首哥ー百首哥を(荒)、\*くれなひーくれなひ  
(袖学荒彰天群)

六〇四\*成らんー成りなん(袖学荒彰天群)

六〇五\*猶ーなを(袖学荒彰天群)

六〇六\*うかりし事ーうかりし物(彰)

六〇元\*をのつからーおのつから(天)

六〇二 あさきせもありてふ物をなみた河ふかき思ひにしつむ比哉  
平 幹 時  
題しらす 藤原 朝基

六〇三 今更にぬるらんそてもたのまれすわれそつらさのねをのみはなく  
冷泉前大納言家に恋百首哥みせたてまつりける中に 藤原 時朝

六〇三 人こふる涙のいろにあらはれてからくれなひに袖そ成行  
あひしれる女のもとへきるへき物なとつかはしたりける

に、さらすともとてかへしたりければ 信生 法師

六〇四 架りしを思ひかへすかかよ衣さてやうらみのつまと成らん  
女かへし

六〇五 せめて猶あかぬ名残にさよ衣夢にみゆやとかへすはかりそ

寄夢恋 藤原 景綱

六〇六 うつゝとてなにうつりかの残るらんみしよは夢の契なりしに

浄意 法師

六〇七 逢ことこのうつゝは夢に成行と夢はうつゝのこゝちやはする

源 長 継

六〇八 うつゝにてうかりし事そのまゝにみえつる夜半の夢もうらめし

坂上 道清

六〇元 \*をのつからあふとみしよの契にて夢より外はおもひてもなし

証定 法師

六〇〇 わひぬれは夢てふ物をたのみてもねられぬよはそかひなかりける

寄月恋 藤原 時朝

六一 有明のつれなき月もかたふきぬ人の心をいつとたのまん

稲田姫社十首哥に、不知在所恋

藤原 蔭清

六二 しかすかにとへはこたふる山ひこのすみかをいかてしらせさるらん

隔恋

坂上 滋家

六三 あしかきのつらきへたてのなかりせはみても心のなくさみなまし

宇都宮神宮寺廿首哥に

謙基法師妹

六四 \*とをき―遠き(清)、\*へたて―やたて(清)

六四 うみ山のとをきへ\*たてもなかりけり人の心のかよふなかに

近恋

大中臣能範

六五 いせの海しほのみちひのめのまへにかはるは人の心成けり

九条内大臣家に三百六十首哥たてまつりけるに

藤原 時朝

六六 しほむかふおきつ舟人こきまよひあはれゆかれぬよひのみち哉

題しらす

証意 法師

六七 風ふけはあら磯なみのうつけかひ心くたけてあはぬこひ哉

隔山恋といふことを

平 光 幹

六八 いてぬまの月に心やなれぬらん山のあなたの人をこふとて

恋哥中に

清原 時季

六九 雲まよりほのかにみゆるみか月の我のみ物を思ふころ哉

くれをたのめてこさりける女のもとへいさむる」人ありと

信生 法師

きゝて

七〇 あまの原よこきる雲やへたつらん空たのめなるいさよひの月

題しらす

蓮生 法師

七一 面かけはなみたの露にうつりけりみるもかなしき有明の月

六〇 \*たのめて―たのみて(群)

六六 \*よひ―こひ(神学荒彰天群)

宇都宮神宮寺廿首哥に

源基氏

六三 うき物となどわかたために成ぬらんこれもみしよの有明の月

稲田姫社十首哥に

藤原朝景

六三 つれもなき人の面かけいくたひか有明の月に思ひいつらん

寄月恋

照因法師

六四 おほかたの月にねぬよのまくらたにさひしき物を秋のならひは

藤原景綱

六五 涙もしらしな月はわか袖のつゆをは秋に思ひならひそて

藤原頼業

六六 物思ふ袖やしくるゝわきてよもなかむる山の月はくもらし

寄露恋

清原成朝しきり

六七 露ふかき秋の野はらの草のはをよそに思はぬ袖のうへ哉

信生法師

六八 思ひあらはわけてもゆかむさくらあさのおふの下草露しけくとも

旅宿恋

西入法師

六九 思ひかねうちぬるとこの枕とてむすふ草葉もつゆそこほるゝ

寄虫別恋

藤原景綱

七〇 あけたてはねこそなかるれ蟬のはのひとへに難面き袖の別に

寄鳥恋

藤原重頼女

七一 あふことを思ひたえたる暁もわかれし鳥のねにそなかるゝ

秋恋

藤原重継

七二 色かはる野はらの草のつゆみても人の心の秋そ悲しき

題しらす 名忍 法師

六三 思ひかねまどろむほとは忘<sup>ら</sup>。れてつらきは夜はのねさめ成けり

百首哥中に、寄身怨恋<sup>ら</sup> 藤原 泰綱

六四 うとくなる人はなか／＼つらからてかへりて身こそ恨られけれ

夢中逢恋 藤原 国弘

六五 なけきつゝうちぬる床に逢とみる夢の名残もおきうかりけり

稲田姫社十首哥、憑契約恋 西円 法師

六六 ねたくこそおなし心になりやらね人の忘るゝ契りおほえて

寄書恋 源 宗 景

六七 かくはかりうはの空なることのはをたれかたのむの鴈の玉つさ

信生法師のおこせたる文のはしにかきて女のかへしける

六八 浜ちとりかよふかた／＼あまたあれはふみたかへたるあとかとそみる

寄鳥恋 道阿 法師

六九 水鳥のなみたの玉もよなくはうきねの床になきあかしつゝ

西円 法師<sup>ニウ</sup>

七〇 河と見は袖にもかよへさよちとり人のふちせになみまなきころ

恋の心を 浄意 法師

七一 たのまれぬとりとならのは契哉枕をたにもえやはならふる

藤原 景綱

七二 たまくらにつもる涙もわたつみとあれにし床に恨てそぬる

慶西 法師

七三 君を思ふ心のほとはわたつみのちひろのそこもなをそよはぬ

六三 \*おなししをなし(神学荒彰)、 \*おほえてーおほ

へて(神学荒天)、 おもへて(彰)

六七 \*寄書恋ー寄書恋(神学荒彰天群)

六八 \*おこせーをこせ(群)

六九 \*道阿法師ー導阿法師(彰群)

七三 \*をよはぬーおよはぬ(神彰天)

女のもとより今は思ひもいてしなと申たりける返事に

藤原 時朝

六四 人はいさわれは忘しいもかしまかたみのうらの有明の月

寄松恋

有尊 法し

六三 \*恨みしーうらめし(神学荒影天群)

六三 いはしろのまつも恨みしあはぬまの久しかれとはむすはさりしを

藤原時朝十首哥よませける中

藤原 泰重

六二 たゝならぬ夕への空のけしき哉思ひいてゝも袖ぬらせとや

寄雲恋

清原 政高

六一 我こひはしのふの山にたつ雲のきえて跡なき契成けり

怨恋を

丹波 国長

六〇 \*たえぬーたへぬ(群)

六〇 ことのはのかれのみゆけはまくすはらうらみにたえぬ露そこほるゝ

暮秋恋を

権律師隆快

五九 \*風にー風の歌に(字)

五九 あきはつるあらしの風\*にいかならん我身うき田の杜\*のことは

百首哥中に

想生 法し

五八 \*かるゝーかはるはる(影)、\*物かはーものとは(神学荒影天群)

五八 君により今そしりぬることのはのあきはてぬれはかるゝ物かは

ひさしくをとつれさりける女のもとへ、なか月のすゑつか

たにつかはしける

平 時 兼

五七 \*おきー萩(学荒群)、\*音信ーをとつれ(学荒)

五七 吹すくる風をたよりのおきの葉のあきはてぬとや音信\*もなき

哥合し侍けるに、冬恋を

藤原 景綱

五六 あきはてし心よりこそかれにけめことのはにをく霜はあらしを

すみわたりける女なか月のすゑつかたにものへまかりて、

いまはかへるましきよし申たりけるに、うつろへる菊につ

五七

六三 \* やりにけるーやりにける(彰天群)

六三 けてやり＊にける  
長月はあすをかきりときく物をけふあきはつる人も有り  
女かへし  
浄意 法師

六四 \* 色ー花(天)、\* わひそーわひれいそ(学)、我そ(彰天群)

六四 しら菊のうつろふ色＊をみするにもあきはてけりとわひ＊そしりぬる  
題しらす  
顯顯信法師女

六五 \* おしーをし(神彰天清)、\* 絶ーたへ(神学荒彰)、\* けれーける(学荒彰天群清)

六五 おし＊からぬわか玉のをはなからへてあひみしことそ絶＊はてにけれ  
藤原親朝女

六六 \* たえーたへ(神学荒彰天)

六六 あはれとは思ひもいてよ花かたみめならふ色にうつりはつとも  
久しくとはさりける女のもとより信生法しに申つかはしける  
る

六七 \* 明諭ー明諭(学荒彰天)、明諭(群)、\* をきーおき(神彰天群)

六七 さてもさはかきたえぬるかさゝかにのいかに成へき心ほそさそ  
寄草恋  
権少僧都明諭

六八 \* たえーたへ(神学荒彰天)

六八 たのめを＊きし秋や昔の秋ならぬにはの蓬のもと身のにして  
源 光 泰  
六九 おほかたの草はゝ秋にあらねともわか身はかりの袖のしら露  
惟宗 経光

六九 \* やましろのーやましろ。(彰)、\* たへーたえ(学荒群)

六九 かよひこし道のしは草しくれたゝさらても人のあとし見えねは  
清原 公高  
七〇 わすれ草さこそは今はしけるらめ思ひたえたるなかの通ち  
安部 泰弘  
七一 やましろのとはれしこともかきたへて難波のあしのねこそなかる＊  
藤原 親朝

六三 \* いてぬーはてぬ(天)

六四 \* たえーたへ(神彰天)

六五 \* 絶ーたへ(神彰天)

六六 \* としそーとしそも学、\* けるーけり(学)

六七 \* 寄水恋ー寄水恋(学荒)、\* 絶ーたへ(神天)

六八 \* せきーせき(神学荒彰天群)、\* ひまなくてーひまもなく(彰)、\* 被ー袂(神学荒彰天群)

六九 \* たえーたへ(神彰)

七〇 \* 成行はーなりゆかは(神学荒彰天群)

七一 \* たえにしーたへにし(神天)、\* 絶もーたへも(神彰天)

六三 うき身をは思ひもいてぬ草の名の人のゝきはにしける比哉

たいしらす

藤原 泰綱

六四 なかれての頼みも今はなかりけり思ひたえにしな川の水

信生 法師善ウ

六五 きゝわたるなからの橋の跡もなく絶て久しき身のちきり哉

坂上

家光

六六 あちのすむすさの入江のそなれ松なれて恨みのとしそへにける

藤原 蔭清

寄閑恋

六七 水鳥のおりある池のうす氷むすひもはてすなかや絶なん

藤原 時朝

六八 あたちのゝあたにも人を思はぬになこそその間の名こそつらけれ

浄意 法師

六九 思ひせき心の滝のひまなくて被ひてにおつるわかなみたかな

西円 法師

七〇 たえはつる人の心のみしかさを忘らるゝ身の命ともかな

藤原 泰綱

七一 こひしさのさても昔に成行はわするゝほとのとしもへぬらん

藤原 泰綱

百首哥に (十三行分空白)

五五ウ

新 和詞集卷第九

雑哥上

藤原時朝稲田姫社にて十首哥講し侍けるに、社頭立春

右大弁光俊朝臣

六三三 \*かはかみとーかはかみは(学荒彰天群)

六三三 ちはやふるこのやへかきも春たちぬひのかはかみと氷とくらし

浄意 法師

六三四 神かきやよるへの水のうすこほりとくるもやすく春はきにけり

橘 公成

六三五 しかの浦のみきは氷とけにけり波より春や立はしむらん

下野国よりしはすのつこもり比にまかりのほり侍りて、あ

素還 法師

六三六 \*猶ーなを(神学荒彰天)

六三六 春かすみたゝはといひてこぬ人は鶯よりも猶またれけり

む月のはしめ雪のふる日、藤原泰綱もとへ申つかはしける

平 長時

六三七 今はゝやこのめも春の花の枝に面影みするけさの白雪

返事

六三九 \*《作者名》藤原泰綱(神学荒彰天群)

六三九 春の色あらはれにける花のえに咲てもちらぬけさの白雪

中原 盛綱

六四〇 \*老ーおひ(神学荒彰天)

六四〇 老らくのわか身につもるたくひ哉残るともなき春の淡雪

藤原景綱のもとにて題をさくりて哥よみ侍けるに、雨中若

藤原 経光

六四〇 \*猶ーなを(神彰天)、 \*すきぬまにーすきにまにぬ敷

六四〇 ぬれくも猶やつまゝし春雨のふるのゝわか菜時すきぬまに

菜 藤原 経光

藤原時朝在京之時、会し侍けるに

惟宗 行經

六一 かすか野は山のふもとの近ければ日影待いてゝわかかなをそつむ

題しらす

想生 法し

六三 \* 思へは―をもへは(天)、\*をしき―おしき(学荒

天群)

六三 開そむるわか木の梅の行末を思へはををしきわか命かな

円嘉 法師シ 垂ウ

六三 \* おい―おひ(神学荒彰天)

六三 \* おいらくのわかすむかたの池水にふる木の梅もかけやはつらん

鎌倉大納言家の月次御会に、海辺霞

藤原 泰綱

六四 \* 大納言―入道大納言(神学荒彰天群)

六四 つの国の難波の春をみわたせは霞たなひく浦の初しま

宇都神宮寺廿首哥に

権律師謙忠

六五 \* 宇都―宇都宮(神学荒彰天群)、\*あえね―あら

ね(神学荒)、あへね(彰天群)

六五 なにとなく身をしる雨に袖ぬれてほしこそあえねはるの夕くれ

たいしらす

蓮生 法師

六六 おるてにも物うくもなし紫のわらひも草のゆかり。おもへとはと

浄意 法師

六七 軒ちかく春のすゝめのむつれきてこそその古巢のあともとむなる

藤原 景綱

六八 \* さへつる―さゑつる(神天)、さえつる(荒群)

六八 ことしより花さく園のもゝちとりさへつる春も三千世へぬらん

宇都宮神宮寺廿首哥に

平 秀 政シ

六九 鶯の花に鳴ねの物うきはかねてわかれのおほえやはする

西円 法師

六〇 いかにして色をもかをしらしらぬ身の花をあはれと思ひ初けん

題しらす

平 幹 時

六三三 \* 植—うへ(神学荒群)、\* 老—おひ(学荒)

六四四 \* 花の—花(天)

六五五 \* 花の—花に歌の(学)、花に(彰天群)、\* 心を—心の  
(神学荒彰天群)

六六六 \* おく—をく(彰天)

六七七 \* 大江季房—大江秀房(天)、\* 音—をと(神学荒彰  
天群)、\* ころ—すつ(天)

六一 かしを山花やさくらむつくはねのそかひに見えてかゝるしら雲

庭にうへたりける桜のふる木になりたるを見侍て 藤原 時朝

六九二 植\*をさし花はふる木に成にけりわか老らくのほとそしらるゝ

故郷花 坂上 道清

六九三 ふりにけるあとゝも見えすさゝ波やしかの都の春の花その

閑居花 藤原 景綱

六九四 さきなはと思ひし花のうつるまでとふ人またて過る春哉

寄花述懐 弥陀信法師

六九五 うき世をはいとひはてんと思ふ身の花の心をなを残るかな

長円 法師ミウ

六九六 世をうしと花も人めをいとひてやわかすむ山のおくにさくらん

古寺落花 大江 季房

六九七 かねの音もなみたもさそふはつせ山花ちるころの夕くれの空

百首哥中に、更衣 蓮生 法師

六九八 うつり行人の心もしられけり春を忘るゝ衣かへして

首夏 仙風 法師

六九九 わかやとの藤さきぬれはほとゝきすまつに心をかけぬ日そなき

夕郭公 照因 法師

七〇〇 待わひぬさのみはいかにほとゝきす夕への空のむなしかるらん

鶴岳社十首哥に、船中郭公 藤原 時朝

七〇一 かしまかたおきすの杜の子規ふねをとめてそ初音聞つる

題しらす 諦如 法師

古四 \* 河長―河おさ(神学荒彰天群)

古五 \* をと―音(学荒群)、\* たちかる―たちかはる(神学荒彰天群)

古六 \* 荻―おき(神学荒彰天群)

古七 \* あへす―あへす(神)、あえす(学荒彰)、あらす(天)

古八 \* をと―おと(清)

古九 \* をく―おく(神彰天)

七二 われのみと待つるくれを杜鵑又たかために鳴て過らむ

称仏 法師

七三 里とをき山のすそのゝ蜀魄たかために啼初音成らん

源長 継

七四 やましろの淀の河長そてぬれて入江のまこも今やかるらん

大江 季房

七五 浪のをと\*も\*たちかるなりたなかみやうちのわたりの秋の初風

藤原 朝基

七六 初秋風を

七〇 一つのまに秋とて色のかはれはや荻\*ふく風のけさは身にしむ

藤原時朝館にて題をさくりて人く哥よみ侍けるに、田家 藤原 蔭清

七二 あしひきの山田の早苗とりもあへすやかても秋に鳴子ひく也

田家秋を 浄意法師女

七三 わかやとは稲葉のかせそをとつるゝあせのかよひちくる人もなし

野秋風 藤原 泰綱

七四 をく露の玉まく野へのくすの葉にうらかなしくも秋風そ吹

父清原高経宇都宮九日会の頭のかりし侍けるほとに、いと

まなきよしを人のもとへ申しモツ つかはすとて

清原 公高

七〇 しるらめや野へのうつらをふみたてゝこはきか原にかりくらすと

秋夕 坂上 道清

七二 世中のうけれはおつる涙哉かこつかたなき秋の夕くれ

七三\*なれなみ―なれるみ(学荒彰天群)

七三 ものをのみなげかむためとなれなみの限しらるゝ秋の夕くれ  
西円 法し

七三\*をき―おき(神彰天清)

七三 白露のをき<sup>\*</sup>所なきわか身越<sup>越</sup>草のいほりも秋風そふく  
藤原重頼女

七四 草はのみ露けかるへき秋そとはわか袖しらて思けるかな  
信聖 法師

七五 秋の野にたかゝるかやのなはをなみいふかひもなき草葉成らん  
清原 公高

七六 我やとはのきはの山のたかけれはまちとをにのみ月をみる哉  
鶴岳社十首哥<sup>\*</sup>、山路月  
藤原 時朝

七七\*哥に―哥(天)、\*おのえ―をのへ(神学荒彰天)、  
おのへ(群)

七七 あしからの山のおのえ<sup>\*</sup>にのほりてそ空なる月もちかつきにける  
名所月  
蓮信 法師

七八\*さえ―さへ(神彰天)

七八 さえまさる月のかげをはしもとゆふかつらき山に夜や更ぬらん  
野亭月  
藤原 景綱

七九 里とをき草のいほりに秋をへてのへもはるかか月をみる哉

七〇\*をと―音(群)

七〇 よる波のをとにねられぬ関守はいく夜かすまの月をみるらん  
海辺月  
関月  
無量寿丸

七二 きよみかたよせくる波のいはまよりくたけてかへる夜半の月かけ

源 長 継

七三 秋の夜の月すめとてや松陰のきよきなきさをあらふ白波

海上月 顯信法師女

七三 浦風にやへのしほちは霧はれて月をしるへに夜舟こくなり

藤原時朝館にて正元々年八月十五夜会しスウ侍けるに、

池月を 淨意 法師

七四 みなそこにやとれる月をありとみてとらはやとらんさる沢のいけ

旅宿月 西円 法師

七五\*(歌)―(初句「今はねて」墨滅)(彰)、\*さやけ

七五 今\*はねてあけはと空を待へきにたひなる夜しも月のさやけ\* 平忠幹

七六\*おい―おひ(神学荒彰天) 寄月述懐 宇都宮神宮寺甘首哥\* 謙基法師姉

七六 をのつからうき身も月はめてつれとおい\*となるまてよにはしられす

七七\*哥―哥に(神学荒彰天群清) 昔みし人はいづくにかくるらんひとりくまなき山のはの月 淨忍 法師

七七 さひしとてわれさへやとをうかれなはひとりやすまん秋の夜の月 弥陀信法し

七六 さひしとてわれさへやとをうかれなはひとりやすまん秋の夜の月 題しらす

七五 わかあきとまちこし月をみるはかり涙よははしくもらさらん\* 淨意 法師

七六\*さらなん―さららん(神) 物思ひ侍けるころ月を見侍て

七五 定めなきよにおもなれて秋の月かはらぬかけのめつらしき哉

七六\*かはらぬ―かわらぬ(天) 百首哥中に 藤原 実好

七三 月も又我をわするな秋をへて見しはかりなる契なりとも

七三 すみくく西へ入ぬる月をみてそ此世にとまる身はうかりける 行円 法師

鎌倉三品親王家に三百六十首哥たてまつり侍る中に、月前

七三 \* 猶一なを(彰)、\* 難面き一つたなき(天)

述懐といふことを

藤原 時朝

七三 有明の月よりも猶難<sup>\*</sup>面きはうき世をいてぬわか身成けり

旅宿鹿

坂上 家光

七四 草枕ならはぬ野へのさひしさを忘るはかりに鹿を鳴なる

山家鹿

空寂 法師

七五 しかのねのきゝすてかたき秋の夜はみやまの廬に心とまりぬ

田家鴨

藤原<sup>\*</sup> 滋家

七六 \* 藤原滋家一坂上滋家(彰)、藤原隆家(群)

七六 ねさめする山田のいほにきこゆ也晝ことのしきの羽かき

題しらす

藤原 景綱

七七 山さとのにはの紅葉ゝふみわけて更にとはれぬ秋そかなしき

もみちせぬときはの山にふる雨は秋もみどりの色やそむらん

藤原 基政

七八 たに風のいほりの下のした紅葉わか涙にも色やそふらん

きてみればかさとり山のかひもなし時雨にぬれてもみちしにけり

蓮生 法師

七九 きたみればかさとり山のかひもなし時雨にぬれてもみちしにけり

紅葉ゝはしくれてふかく成にけりこけの袂につれなかりけり

慶西 法師

八〇 いたつらに秋はくれぬるなか月の空に残れる有明の月

百首哥中に

信生 法師

八一 \* 袂に一袂そ(学荒彰天群)、\* けり一ける(神学荒彰天群)

八二 暮秋虫

清原 貞高

八三 かれて行秋はすゑのゝまくす原恨みかほなる虫のこゑ哉

藤原 泰綱

八四

七四 \*藤原泰綱―藤原泰重(学荒彰天群)、\*おしみ―  
をしみ(神彰)、\*をのえ―をのへ(神荒彰天)、  
おのへ(学群)

九月晦日鹿のなきけるをきゝて

藤原 泰綱\*

七四 暮てゆく秋のかきりをおしみてやをのえの鹿のけふは鳴らん

初冬を

名信 法し

七五 けさよりはおきのかれはに吹風のまたをとかはる冬はきにけり

七六 しろたへのふしのみゆきのけぬかうへに又も降しく冬はきにけり

河上落葉

藤原 重継

七七 緑なる色ともみえすもみち葉のなかれてきたるたけかはの水

七八 龍田河。瀬にたゝむなみのあやを錦になすは木葉成けり

冬山

藤原 泰朝

七九 もみち葉のなかれておつる立田川せきもとゝめぬ水のしからみ

八〇 風のかすよそのもみちの色たにも見えずなりぬるときは山哉

時雨後月を

藤原 親朝

八一 神無月時雨のあとの板間より思はぬほかの月そもりくる

八二 ひさかへてしくるゝ峯の木間より猶かけさゆる冬の夜の月

吹はらふあらしの山の月影に時雨もはてぬ村雲の空

八三 むら雲の月のあたりに残る哉又や時雨む冬の夜の空

八四

八五

八六

八七

八八

八九

九〇

九一

九二

七三 \*猶―なを(神彰天)

七五 空底空学、そこ(彰天群)

七五 \*うへのうへに(神)

七五 \*たまゝたまえ(神学荒群)、たまも(彰)

七五 \*をと一音(群)、\*さえて一きえて(神)

九条前内大臣家に三百六十首哥たてまつりけるに 藤原 時朝

七五 あらしには雲もたまらぬ冬の夜にいかすみてか月のこるらん 藤原 泰重

河冬月

七五 みなと川にほのかよひちみゆるまてなみの空にも月はすみけり 象観 法師

題しらす

七五 むは玉のよるとは誰かわきそめし氷のうへの冬のよの月 玄長 法師

七五 かりのこすたまゝの芦も霜枯てむれゐる鳥のかくれかそなき 藤原 公綱

暁千鳥

七五 あかしかた海の松風をとさえて有明の空にちとり鳴也 証願 法師

七五 明ぬるかふしの川霧立まよひちとり鳴也うき鳴か原 藤原 泰綱

河水鳥

七五 水鳥の下になかるゝ思ひ川いかにくるしきねのみ鳴らん 想生 法師

故郷雪

七五 はつ雪の古郷人にことゝはん思ひやるにもあととありやと雪のふる日、人のもとへやるふみをもてまうてきたりけ

る、そのうへにかきつけて返しける

七五 ふる雪にふみたかへたるあとなれととはれかほなる庭の面かけ 行円 法師

海辺雪

七五 鳴海かたをのかふる道雪。ふれはなみまや人のゆきゝ成らん 生願 法師

題しらす

浄意法師女

七五 くれはつることしのけふを身のうさの限ときかはうれしからまし 証定 法師

七六 心をはをくりむかへぬとし月のすゝろにたけて身はふりにけり 藤原 時朝

七七 昔おもふ心の空のしくるゝはわかおいらくのなみた成けり 権律師隆快

百首哥中に、暁を

七八 秋のしもに。てらのかねをまかへても猶ゆめふかし暁の空 信生 法師

七九 過にける此世の夢を思ふにも残すくなきあか月の空 高階 重氏

八〇 まとるまぬ昔かたりのなかき夜もあかてことはの猶残りつゝ 館にて哥合し侍けるに、月前鶏 藤原 景綱

八一 月をみて更るもしらす成にけり暁とても鳥のなくらん 関路鶏 坂上 道清

八二 鳥のねにあけぬときは逢坂の関のとくらき杉の下かけ 紀行 宣

八三 関のとはあけやしぬらん逢坂のゆふつけ鳥は今ぞ鳴なる 清原 時季

八四 関の戸もいまやあくらん逢坂の木綿付鳥のこゑしきる也 寄都宮神宮寺廿首哥 素還 法師

八五 あまをとめ舟のりすらし浦風のなこの入江にたつかへるなり 江船 照因 法師

七〇 \*おいらくーおひらく(神学荒影天)

六一 \*。てらーのてら(学荒影天群)、 \*猶一なを(影天)

七〇 \*猶一なを(影天)

七一 \*暁とてもー暁とても(神学荒影天群)

七二 \*関路暁ー関路暁(学)、関路鶏(影)

七五 \*哥ー哥に(神)、 \*入江にーいりえの(天)

七六 みつしほのたよりを待てなにはえのあしまつたひに舟かよふ也

河船 西命 法師

七七 つなてひ。こゑはかりして見えぬ哉霧たちこむる淀の河舟

海路朝船人 藤原 朝氏

七八 霧はるゝすまのうらはの朝なきにあかしのとより出る舟人

海夕船人 藤原 景綱

七九 わたの原ゆふ風あらし波間よりみゆるこしまによる舟人

海路夕煙 西円 法師

八〇 こきよせよ夕日にみゆる山もとはとまりなれはそ煙たつらん

たいしらす 藤原 基政

八一 しほきこるあまのゆきゝのあとみえてうらよりつゝく山のほそみち

海眺望 藤原 時朝

八二 はるかなるおきつこしまにたつ波を空よりかゝる雲かとそみる

宇都宮神宮寺廿首哥に 高階 重氏

八三 水上にみなはさかまきをとたてゝおちくる波のすゑそのとけき

浄想 法師

八四 あらましに心やすめし山里もけにすむ時は住うかりけり

題しらす 蓮生 法師

八五 今更に都へかへる心かなしはのいほりに身をはとゝめて

高階 重氏

八六 たにふかき岩ほのなかのかひもなし心のおくそ身はかくしける

信生 法師

七六 \*海路朝船人—海路。船人「路」字左傍に不審紙  
(学) 海路船人(允)

七六〇 \*西円法師—西行法師(天)、\*煙—けふり(彰)、  
けむり(天)

七三 \*をと—おと(神彰天)

七四 \*浄想法師—浄忍法師(神学荒彰天群)

七五 \*〇印—アリ(学荒彰群)

七六 \*おく—をく(神彰天)

七五\*すまゐ―すまい(神)

七七 跡たえていくよになりぬしら雲のかゝるすまゐをとふ人も哉

本ノマ、

七六\*思ひに身は―思ひに身は(神)、思ひに身は(学  
荒、思ひる身は(彰天群)、\*しほり―しをり  
(群)

七六 山ふかく思ひに身はしほりせしうき世にまよふ人もこそとへ  
榎柴

\*しほり―榎(学荒)

七九 暮行かはたかききすてゝ跡に又枝おりそへんみねのしゐ柴  
深夜松風

七九\*すてゝ―すてし(学荒)、\*おり―をり(彰彰天、  
\*しゐ―榎(学荒)

七九 ね。めしてすゝろに物のかなしきは深行夜半の松風のこゑ  
百首哥中に

七二 ふきしほると山の風はそれなからのきはの松のをともはけしき  
鶴岳社十首哥に

七三 山里のならひとしのふさひしさも思ふにまさる嶺の松かせ  
山家月

七四 山さとの柴のかこひもあればゝねさめのとこに月をみる哉  
題しらす

七五\*をと―音(群)

七五 思ひやるみ山のおくの秋の空またみぬ月にすむ心哉  
藤原 泰綱

七六 つらき身をわか心さへすてにけりみ山のおくにやともとめつゝ  
山家秋

七七 深山へやすみならひてもさひしきは桐の葉落る秋の夕くれ  
源 頼明

七三\*山家月―ナシ(荒)

七三 西円 法師シキウ

七四 空寂 法師

七五 源 宗景

七六\*おく―をく(彰彰天)

七六 源 宗景

七九\*おく―をく(彰彰天)

七九 源 宗景

七九 源 宗景

七九 源 宗景

△〇〇 \*経時—経時(本行「経」字草体)(神)、\*亡室—  
己室(本行「室」字「室」トモ判読可)(神)

△四四 \*合点—ナシ(神天)、\*煙たつ—けふりたつ  
(彰)、けふりたつ(天群)、\*思はずは—思はず  
は(彰)、思はずは(天群)、\*ならまし物を—  
われやならまし(彰)、ならまし物を(天群)  
△五五 \*たえず—たへす(神彰天)、\*やしま—やまし  
(天)

五九 山里はうき世中のほかゝとてすむかひもなき秋の夕くれ

宇都宮神宮寺廿首哥

浄忍 法師

七九 うきよにてなかめしよりもさひしきは草のいほりの秋の夕くれ

武蔵守平経時の亡室墓所へまうてゝ、それより尾羽といふ

蓮生 法師

△〇〇 みし人のすみけるやとをゆきすきてたつぬるやまはあきの夕くれ

(十一行分空白)

レ 四ウ

新 和詞集卷第十

雜哥下

六帖題にて哥よみ侍ける中に、日を

藤原 時朝

△二 いるる日のかたはあつまの山賤もあふくは君かみかけ成けり

月

△三 かさゝきのみねとひこゆるかす見えて月すみわたる雲のかけはし

けふりのちかきほとにたつをむつかしなとひとの申ければし

藤原基綱女

△三 今更にけふりをなにといはふらんむろのやしまのちかきあたり

むろのやしまへまかりあはんと人にやくそくして侍ける

藤原 親朝

△四 煙たつむろのやしまと思はずは君かするへにならまし物を

か、さしあふ事侍て申つかはしける

藤原 景綱

△五 たえずたつけふりやむろのやしまもるくにつみ神のちかひ成らん

八〇六 \*たえせぬーたへせぬ(神天)

八〇六 \*むかしよりたえせぬ物はしもつけやむろの八嶋の煙成けり

源行宗

八〇六 \*たえすーたへす(神彰天群)

八〇七 よそに聞むろのやしまをきてみれば煙はかりそ名には立ける

安部 資氏

八〇六 \*たむのやまーたむのやま(彰)、多武の山(群)、

八〇八 よとゝもに思ひの煙たえすたつむろの八嶋やわか身成らん

京極入道中納言

\*をのへーおのへ(群)、\*さらぬーさへぬ(神)、

八〇九 たむのやまたのむをのへの身はかくてはる日もさらぬふちのしほれば

通世のころさしある人の僧綱になり侍るかもとへ申つか

はしける

浄意 法師

八〇七 \*侍るかー侍る(神学荒彰天群)

八〇九 かのきしに心をかくるたよりもうれしかるへきのりのはしかな

法橋 通秀

八〇七 \*法橋通秀ー法橋道秀(神学荒彰天群)、\*とゝこ

八二二 とゝこほる事もなくてやわたりなむ心にかけしのりのはしをも

仁治三年大嘗会の寄検非違使つとめ侍りて、かへりけるみ

ちにてよみ侍ける

藤原 時朝

八二二 \*仁治三年ー仁治三年(群)、

八三三 よそにみしひかけのいと玉かつらかけてそきつるをみの衣て

人くゝの点あひたる哥見よと申ておこせたりけるをかへし

\*いとのーいとま(字)、いとま(荒)、\*をみー

つかはすとて

浄意 法師

おみ(彰天)

八二三 \*おこせーをこせ(群)、\*ことのはー物とは(彰)

八三三 うれしくもいまそ尋て三輪の山しるしの杉のしけきことのは

返し

八四四 人ことのやまとことのは尋見よわれのみしけき杉のしるしか

寂身 法師

師匠のかきをきたる聖教を見侍けるついでに

有信 法師

八五 \* ついてーつひて(荒)、\*をしへーおしへ(学荒)、

\*を、<sup>く</sup>。ーおく(神彰天)

八六 \* とふをはーとを、は(天)

八七 \* (○印)ーナシ(彰天)、\* (合点)ーナシ(天)

八八 \* (○印)ーナシ(彰天)、\* (合点)ーアリ(学荒彰群)、\*おなしーをなし(神天)

八九 \* (○印)ーナシ(学荒彰天群)、\* (合点)ーナシ(学荒彰天群)

九〇 \* (○印)ーナシ(彰天)

九一 \* おくーをく(神彰天)、\*ふかきーふるき(学荒)

九二 \* おくーをく(神彰天)、\* (合点)ーナシ(天)

九三 \* をけるーおける(神彰天)、\*きえすーきへす(神)、\*有とーありとも(群)

八五 \* をしへ<sup>く</sup>を。ここの葉なくはいかにして昔のあとを思ひいてまし

題しらす

藤原 頼業

八六 \* かすならぬ人にはよろし山ひこのとふをはいかてこたへさるへき

藤原時家かもとへ申つかはしける

蓮生 法師

八七 \* 忘るなよなかれの末はわかるともひとつみ山の谷川の水

返し

藤原 時家

八八 \* わかるともいかゝわすれん水上はおなしなかれの谷川の水

駿河国うとはまにとしころすみ侍けるか、うつ宮にうつりてのち、かしこなる人のもとへ申つかはしける

想生 法師

八九 \* いか又立かへりなむ有度浜のうとく成にしあとの白浪

題しらす

蓮生 法師

九〇 \* としをへてなれにし跡の面かけをかたみに見よとたれとゝめけん

浄意法師家集を衣笠内大臣家に見せたてまつりたりければ、おくにかけ付て給ける

九一 \* をしなへてふかき色なることのはの露さへ袖にかゝりぬる哉

藤原泰綱に古今かきてたひけるおくにかけつけられける

京極入道中納言

九二 \* あとをたにありし昔と思ひいてよすゑの世なかき忘かたみに

よみをける哥を人のもとへつかはすとて

権律師隆快

九三 \* のつから心にうかふうたかたのきえすは有とかたみともみし

所望かなはさるけるころ

八四 \* 猶—なを(神学荒彰天)

八五 \* ほとも—ほとに(彰)  
そ

八七 \* ほとそ—ほとに(天)、\* ける—ぬる(彰)  
けい

八〇 \* ある—ある(神)

八三 \* うきことに—うきことの(天)、\* たゆる—た  
ゆい  
まる(学)、たまる(荒)、たふる(群)

八四 さりとともと猶やまつへきあすか川昨日もけふもしつむ身なれば

たいしらす

平光 幹

八五 行末もゆかしきほともまたれつる今はうき身のなくさめそなき

藤原 蔭清

八六 ゆく末の思ひしことのつもりてはこしかたにのみ成そかなしき

有尊 法師

八七 なにとなき心のうちのあらましもなくさむほとそなくさまれける

稲田姫社十首哥に、老後述懐

右大弁光俊朝臣

八八 ものをのみうれへ歎くとせし程にむそちかくも成にける哉

西円 法師

八九 はかなしなけふかあすかのよはひまであしたの露にかゝる心は

百首哥中に

藤原 泰綱

九〇 はかなくもうき身をはしたのむ哉あるにつけては世をもいとほて

九一 今はとてたゝ一すちのみちにのみ思ふ心はさはさりけり

題しらす

有信 法師

九二 なにゆへにいまゝて世をはそむかぬと問人あらはいかゝこたへん

蓮生 法師

九三 つく／＼と思へはさてそ残けるなを人かすにいらぬしるしに

九四 うしといふみなゝをさりのことのはを思ひしるにそ人はすくなき

九五 いかなればよのうきことにたゆる身の法の道にはしのはさるらん

九六 まことなきあらましことにあけくれていつか月日の限成へき

世をのかるへきよし申たりける人の本意とけぬるよし申つ

ル空ウ

八三七 \* つかはして―つかはし(学)、  
(学荒天群)

\* (合点)―ナシ

八三七 色<sup>\*</sup>にいてゝとはるゝほとに成にけりあらましことのすみそめの袖  
出家の心さしあるよしをちゝのもとへ申つかはすとて

浄意 法師

八三六 人しれぬ心のうちのあらましをいつかころもの色にいたさん

返事<sup>\*</sup> 源有 仲

八三九 \* 返事―返し(天)

八三九 紫もあけもみとりもそめてこそよにすみ染のはてもみめ君  
藤原清定たつねまうてきて、かはりにし世のことゝもよも

すからかたり侍けるついでに 浄意 法師

八四〇 \* ついでに―つゝめてに(学彰)

八四〇 あらぬよのむかしかたりをすみそめの袖にもかはる色そ悲しき  
返し 藤原 清定

八四一 雨の夜のむかしかたりのぬれ衣かさねてしほるわかぬ浦波

宇都宮神宮寺廿首哥に 浄忍 法師

八四二 今はわれ旅ともいはしあつまやのまやのあまりに年のへぬれは

題しらす 浄意 法師

八四三 \* (合点)―ナシ(彰天)

八四三 ふきまよふ風によこきるあは雪の思はぬかたにふる我身哉

藤原 朝氏

八四四 \* すまの―すまひ(神)

八四四 人の世もかくこそあれとなくさめてうきをいとぬ身のすまひ哉<sup>\*</sup>  
修行にいて侍けるに、母もなきこのやつになりけるかいひ

おこせたりける

八四五 \* おこせ―をこせ(群)

八四五 うらめしやたれをたのめとすてゝ行我を思はゝとくかへりこよ

返し 信生 法師

八四 \*きえーきへ(神彰天)

八四 とりのこのひとりふるすにとまるともうき世にいかゝ立かへるへき

いのちすつることおほく侍けるに、のかれていままてはへ  
りけることを思ひてよみける

八四 あたしのゝ風にまかせし露の身のいかて今まできえ残けん

出家のゝちふるさとかへりて

八四 古郷の木の下露に又ぬれてむかしにかへるすみ染の袖

六帖題にて哥よみ侍けるに、墨を

ル  
六ウ

八四 する墨に衣をふかくそめなから心の色はあさましの世や

円勇 法師

宇都宮へくたりて侍けるか、事のさういありてまかりのほ

らんとしけるに、なつのころ人のもとへ申つかはしける

藤原 親教

八四 うらみしよ人のあき風ふくなへに時をもまたてかへるくすのは

題しらす

藤原 時盛

八五 世中をうらむとしもはなけれども身のうき時そ涙おちける

西田 法師

八五 草木にもおとりける身のはかなさははるをしらぬに思ひしられて

神阿 法師

八五 谷かけや人にしられぬ埋木のやかてくちなむ事そかなしき

百首哥中に

藤原 泰綱

八五 定めなき世のことはりを思ふには袖に涙そ猶こほれける

源 宗 景

八五 \*しけるーしける(神学荒彰天群)

八五 \*おとりーをとり(学荒群)

八五 \*猶ーなを(彰天)

八五\*をしーおし(学荒群)

八五 浪のうへにうきてたよふ水鳥のをしからぬ身にねのみ鳴らん

藤原時朝かしまのおきすの社にまいりて、彼社僧中に十首

哥すゝめ侍けるに 理然 法師

八五 うなはらやおきつしほあひにたつ波のしつめかたきは心成けり

題しらす 親成 法師

八五 くれ竹のよはうらむへきふしもなし身を鶯のねをのみそなく

清原 時高

八五\*けりーける(天)

八五 うき事もなからへてこそまさりけれつらきは人の命成けり\*

平 時 重

八五 いかにせむあるかひもなき世にふるは心にたかふ命成けり

良義 法師充ウ

八五 なかくに世にある人はいとへとも数ならぬ身そつれなかりける

源 基 氏

八二\*さらてーさして(彰天)、さらしてイ(群)

八二 いけるよりほかにはさらて身のとかもおほえぬものをうらみかふらん

大中臣能範

八三\*おなほとーおなしほと(神学荒群)、をなしほと  
(彰天)

八三 たらちねにわかれしころをかそふればおなほとにも身は老にけり

藤原 時盛

八三 垂乳根のいさめしことをそむきしははかなきまでの心なりけり

坂上 道清

八四 うしと見し昔なれともいたつらに過るはおしき心なりけり

大中臣能範

八五\*おなしーをなし(神彰)

八五 かしこきもうき身もおなし年月のつもるはかりやかはらさるらん

八六 \* 歎かしよーなけかしよ(神学荒影天群)、  
なを(彰天) \* 猶一

八六 うしとでも又此ころを歎かしよ猶なからへは忍はれせせん  
藤原 泰朝

西命 法師

八七 うしとみしむかしの世をはこひなから又此比をなにいとふらん

香阿 法師

八八 かゝる身のうきをはしらて世中をうらみてぬるゝ袖のうへ哉

象観 法師

八九 おいらくの影みるたひにます鏡うつし心もなきわか身哉

藤原 基政

九〇 行末をおもへはなにか歎くへきさすかたのみはある身成けり

蓮生 法師

九一 故郷のゝきのした草しけれともかれにし物は人め成けり

平 忠 幹

九二 題しらす  
かすゝにむかしのことはわすれねとうき思ひてはあるかひもなし

大中臣景範しきう

九三 いつともおなしうき身はかはらぬに昔はなとてこひしかるらん

源 長 継

九四 うけかたき人となりけるさきの世の身にはいかなる心ありけん

西円 法師

九五 むまれても有けむ物をいにしへにあはすとなにか身をうらむらむ

(九行分空白)

八三 \* おなしーをなし(神彰天)